



人権教育だより

京丹後市立大宮中学校

令和5年7月12日

No.6



人権学習を通して 考えたこと

3年生



ことばに形があったら、傷つける言葉は針のように見えて相手に刺さったことを知って傷つける言葉が減るかもしれない。やさしい言葉はきれいな花に見えて、もらって嬉しい言葉が増えるかもしれない。実際には言葉は見えないけれど、自分の口から発した言葉がどんな形で相手に届いているのか想像して、発信することが大切だと思った。

言葉が目に見えるとしたら平和になるのかなと思った。見えたら自分が気づいていなくても、本当は傷ついていることが分かっちゃって余計虚しいかもしれないなとも思った。人によって嬉しい言葉は変わるし、受け取り方次第なところもあるかもしれないけど、一步を踏み間違えないようにしたいと思った。言葉は傷と違って絶対に傷跡が残るから。

人それぞれ考え方は違うから、好きな事・嫌いな事ももちろん違うと思う。でも、言われて嫌な事・されて嫌な事はほとんどの人が同じ事を考えると思う。だから、自分がされて嫌な事はしないようにすることが必要だと思う。また、された方の傷は一生治らないし、した方も最後は自分に返ってくることも知っておいた方がいいと思う。まずは自分から変わる。

3年生は1, 2年生で学習してきた内容の再確認の上に、「いじめは卑劣な行動であり、してもよいいじめはない。いじめをする人は卑劣であり、傍観者も卑劣である。このことを認識したうえで何が大切か」を考えました。また、絵本「ことばのかたち」から「言葉」が持つ力について考えました。

今回は3年生の学習と考えたことを紹介します。(文章は一部編集しています)

いじめの被害者に必ずしも味方がいるわけではないと知った。また、どれだけ苦しめられても、辛くても、犯罪のようなことをされても「いじめ」で終わってしまうと知り、怖いと思った。そして被害者はもっと苦しいんだろうと思った。こんなことが起こらないよう、自分も周りの人の命も大切にしたい。文字だけでは伝わらないこともあるから、直接のコミュニケーションを心掛けていきたい。知らず知らずのうちに傷つけてしまうことを頭に入れ、色んな人との関係を大事にしていきたい。

私はノリや冗談で言った言葉なら相手は傷つかないだろうと思っていただけ、それは自分がただそう思っているだけであって、相手からしたらそれがコンプレックスになったり、傷つけてしまったりすることになると分かった。「言葉なら」「文字なら」ではなく、傷つく言葉を言ったり書いたりする時点で傷つく人がいるから、自分の言葉に責任を持って自分の本当の思いや言おうと思う言葉を形にして、イメージしてから言うようにしたい。

身体的な暴力よりも恐ろしいもの。それが「言葉」「文字」による暴力。傷が目に見えて分からないからこそ、加害者側は被害者がどれだけ苦しんでいるか知らないまま「言葉」「文字」によって暴力を続けていく。それにより被害者は心理的に追い詰められる。見えない傷は治りにくいし、想像以上に恐ろしいことだと改めて分かった。いじめは“犯罪”であると誰もが知るべきだと思う。加害者はもちろん、傍観者・観衆も立派な犯罪者だし、自分はそうなりたくないと思った。自分と同じ人間なんているわけがないのだから、自分と他人を比べる必要はないし、お互いの事を認め合い、楽しく過ごせないからこそ、発する前に自分でよく考えて、自分も相手も気持ちの良い会話・やりとりができるようにしたい。

暴力とはどんな人でも傷つけられる。それは“言葉”の暴力も同じだと思った。でも言葉は目に見えないから相手がどう思っているのか、酷い言葉にどれくらい傷ついているのか、色々なことがわからない。目に見えていたら誰かが助けてくれていたかもしれない。目に見えていたらここまで傷付かなかったかもしれない。いつ加害者になるか分からないのが少し怖いと思った。暴力は肉体を傷つけ、言葉の暴力は心を傷つける。追い詰められた人たちにとって、その言葉は鋭い包丁と同じだったと思う。酷い言葉に負けるのは優しい人だと思う。絶対に失ってはいけない人。私たちは上手に話せているだろうか。話し慣れた言葉だからこそ、何を言われて何を思うかは大体わかるはず。人を傷つけるために言葉は生まれていない。だから、言葉は見える必要がなく、形がないのだと思った。

改めていじめの怖さや残酷さが分かった。これまでいじめの方がもちろん1番悪いけど、いじめられる方ももっとできることがあると思っていた。でも実際は、いじめられている人対全員といった構図が多いから、やっぱりいじめる人とその周りが悪いと思った。道徳「卒業文集最後の二行」では、「ほしいのは本当の友達」という所から相談できる相手がなくて本当にしんどい状況だと思った。言葉にはすごい力があることも改めて感じた。人を励ますこともできるし、傷つけることもできるので、気を付けて使っていきたい。人権学習でいじめのこについて、より理解が深まった。

今回は当事者のことを考えるのではなく、その周りがどう動くかが大切なポイントだなと思った。どのお話にも、被害者と加害者以外の方が正しくないことは分かっていると言えなかったり、悪い方に協力をしてしまったりしていた。被害者は孤独でただでさえ一人なのに、周りが団結して1対全員みたいになってしまえば、心の拠り所もなくなり居場所が見つからなくなると思う。いじめは絶対にあってほしくないし、もしかしたら今この瞬間にいじめられている人がいるかもしれないから、それをただ見る傍観者にだけは絶対になりたくない。人のためになる行動をしたい。

自分も知らず知らずのうちに人が傷つくようなことを言ってしまうかもしれないと思いなおすことができた。この話のように、言葉は「針」にもなり「花」にもなると思うから、誰かと話すとき軽い気持ちで誰かが傷つくような鋭い言葉は言わず、喜んでくれるような花のような言葉を使えるようにしたい。